

「患者の声から生まれた“この薬のあの製剤”」



医療健康資源開発研究所代表理事

小嶋 純氏に聞く

医療健康資源開発研究所代表理事 小嶋 純氏に聞く

良薬口に苦しは過去の時代

「良薬口に苦し」はもう過去の時代。服薬アドバイス改善を考える上で、着目すべきなのが薬剤の味だ。特に小児に対しては、市場性の観点から製薬企業の対応が後手になりがち。薬剤の苦みは患児にとっては大きな苦痛であり、服薬を支援する患児の家族、看護師にとっても様々な工夫を

する“良薬口に苦し”はもう過去の時代。服薬アドバイス改善を考える上で、着目すべきなのが薬剤の味だ。特に小児に対しては、市場性の観点から製薬企業の対応が後手になりがち。薬剤の苦みは患児にとっては大きな苦痛であり、服薬を支援する患児の家族、看護師にとっても様々な工夫を

小児薬の製剤工夫

アイデア絞るべき

— 小児医薬品の課題に気づいたきっかけは。

小児医薬品には、製剤の苦みという課題があるようを感じている。私も製薬企業に在籍していたころ、患者の服薬上の課題に気付けなかった反省がある。医師も薬剤師も患者さんの服薬の現場まで立ち会うことはできず、私も当時は薬剤を飲む苦痛など認識していないかった。

きっかけになったのは、国立成育医療研究センターで患者のご家族や看護師さんとキャンプに行ったとき、「ある薬剤が苦くて飲めない」という声を聞いたこと。その薬剤は錠剤だったので苦いというのはおかしな話だなと思っていたところ

ろ、その患者さんは錠剤を飲むことができず、粉砕して粉薬にして服薬していたために、苦さを訴えていた。錠剤が飲めず粉砕して服薬していたケースは他にも多く、私たちがつくるた薬剤を患者さんがわざわざ自分で飲みやすいように苦労していることが分かった。

それと同時に、小児の服薬をめぐっては、看護師さんやご家族の方が子どもに薬を「飲ませる」

という行為が大変な仕事になってしまっていることを知った。「飲ませる」ことがもっと簡単にできれば、児童を管理する人たちの負担も軽減できるし、小児医薬品の開発では飲ませるためにアイデアを考えなければならない。

クラリスロマイシン

— 成功事例は。

大正製薬の主力品である抗生物質「クラリスロマイシン」が好例だ。当初、苦みが強かった製剤だが、特許切れしてジェネリック医薬品が参入する中で、いくつかのジェネリックメーカーが味を改良してきた。それを受け

て大正も後に出したジェネリック医薬品よりも飲みやすくなり改良され、人間の舌に類似した味

先発品とGEが競争

小児薬を高齢者薬に

— 製薬企業に求めた

こと。

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識していても、採算性の問題から製剤工夫が許されない事情もある。

覚センサーが、製薬企業の研究所などで導入され、製剤化研究で参考にされている。ただ、溶液ではなく苦みを評価することができる、最近の上市新薬を見ると、有効成分の

分子量がだんだん大きくなる傾向にあり、味覚センサーで対応できる医薬品が少なくなっている。

薬剤の有効成分も濃度を薄めて医薬品に使われているものも多く、物質としてこの程度苦みがあるといふことを評価するのか、味覚センサーで正しく反映されているか判断できないのも課題

が期待されており、貢献してほしい。

小児医薬品は優先して開発を進めていただきたい

薬剤師が服薬指導を

— 製薬企業に求めた

こと。

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識していても、採算性の問題から製剤工夫が許されない事情もある。

さらに、

とすると、製剤技術のイノベーションに期待したい。ある企業が製剤の苦みを消す「マスキング技術」の特許申請をしており、これが実用化されれば低コストでいろいろな薬剤に対し汎用的に導入でき、突破口になる可能性がある。また、ジェネリックメーカーは先発品の弱点を改善する役割

薬剤師が服薬指導を

— 製薬企業に求めたこと。

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識していても、採算性の問題から製剤工夫が許されない事情もある。

薬剤師が服薬指導を

— 製薬企業に求めた

こと。

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識していても、採算性の問題から製剤工夫が許されない事情もある。

さらに、

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識いても、採算性の問題から製剤工夫が許されない事情もある。

さらに、

新薬に関しては開発段階での評価に「味」という要素が多く、開発トレンドがすぐに好転するの難しいかもしない。

また、製薬企業では、薬剤の味を改良する必要性は認識いても、